

V337a **ぎんが衛星搭載全天モニター装置 (Ginga/ASM) のデータ解析ツールの開発**

北本俊二 (立教大)

X線放射天体の多くは、いろいろな時間スケールで強度やエネルギースペクトルを変化させる。その変化を調べることで、X線放射天体の物理現象を知ることができる。X線天体の観測が始まりすでに半世紀近く経過した。その間、X線天体の強度やエネルギースペクトルをモニターする装置によるデータが蓄積されてきた。ぎんが衛星は1987年2月から1991年11月まで、搭載されている全天モニター装置 (All Sky Monitor(Ginga/ASM)) により、およそ4年半のモニターデータを取得している。観測当時既知であった天体の強度やエネルギースペクトルのデータはすでに公開されている。しかし、当時未知で後にX線新星等として発見された天体が、Ginga/ASMが観測中、どんな状態であったか調べることは、困難であった。そこで、ぎんが衛星のテレメータの生データに立ち戻って、天空の座標を与えて、その座標からのX線の活動を調べる解析ツールの開発を進めている。テレメータの生データと、衛星の姿勢と軌道データを統合し、既知の天体のカタログに加えて、解析したい天体の座標を与え、Ginga/ASMにより観測されるであろうデータのシミュレーションを行う。天体の強度をパラメータとしてシミュレーションデータを観測データとフィッティングし、カタログされている天体と解析したい天体の強度を同時に求める。現状、まだ、問題は残っているものの、ある程度のデータで解析結果が得られるようになった。本公演では、ツール開発の現状を報告する。